

## (2) 哺乳類

2004年発行の「香川県レッドデータブック 香川県の希少野生生物」(以下、2004年版と略す)では、本県で確認された哺乳類は34種で、このうち自然分布種は25種、外来種は9種である。しかし、2004年以降の調査により、2019年にニホンカモシカが本県で初めて確認され、計7目16科35種となった。そこで、ニホンカモシカも加えた本県陸棲哺乳類生息種のリストを以下に記す。なお、記載順と和名は『世界哺乳類標準和名目録』(川田ら 2018)に準拠した。

香川県産哺乳類は以下のようである。霊長目オナガザル科ニホンザル；齧歯目リス科ニホンリス・ムササビ、キヌゲネズミ科スミスネズミ、ネズミ科ヒメネズミ・アカネズミ・カヤネズミ・ハツカネズミ(外来種)・ドブネズミ(外来種)・クマネズミ(外来種)、ヌートリア科ヌートリア(外来種)；兎形目ウサギ科ニホンノウサギ；トガリネズミ形目トガリネズミ科ニホンジネズミ、モグラ科アズマモグラ・コウベモグラ、ヒミズ；翼手目キクガシラコウモリ科コキクガシラコウモリ・キクガシラコウモリ、ヒナコウモリ科アブラコウモリ・モモジロコウモリ・ユビナガコウモリ・テングコウモリ；食肉目ネコ科イエネコ(外来種)、ジャコウネコ科ハクビシン(外来種)、イヌ科タヌキ・アカギツネ・ノイヌ(外来種)、イタチ科ニホンテン・アナグマ・ニホンイタチ・シベリアイタチ(外来種)、アライグマ科アライグマ(外来種)；偶蹄目イノシシ科イノシシ、シカ科ニホンジカ、ウシ科ニホンカモシカ。

絶滅種(EX)は2004年版ではニホンカワウソのみであるが、その後の調査においても新たな知見は得られなかった。絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)及び絶滅危惧Ⅱ類(VU)は2004年版では該当種がなく、今回の改訂においても同様であった。準絶滅危惧(NT)は2004年版ではアズマモグラ、テングコウモリ、アナグマ及びニホンイタチの計4種であった。今回の改訂に際して2004年版に比べて、アズマモグラとニホンイタチの情報は増加した。しかし、アズマモグラは近縁種であるコウベモグラとの間に、またニホンイタチは外来種であるシベリアイタチとの間に、それぞれ競合が生じていることが考えられ、両種共に今後の生息状況の悪化が危惧されたことから、本改訂においても準絶滅危惧のままとした。

本県におけるテングコウモリの記録は、限られた地域の人工洞窟や隧道で日中に休息していた例が1976年及び1996年にそれぞれ1個体ずつ確認されていたのみであった。しかし、2019年9月16日から17日にかけてまんのう町の大川山で行われた飛翔個体捕獲調査によって、雌1個体及び雄1個体の計2個体が確認された。今回の改訂のための調査によって新たな生息地が見つかりはしたものの、本県における生息状況は未だ十分に把握できていないため、本改訂では情報不足(DD)とした。


アナグマは、自動撮影装置を用いた調査によって本県と徳島県との県境周辺の森林に広範囲に生息していること、及び平野部の森林でも複数の生息地が判明したので、絶滅の心配はないと判断し、本改訂ではレッドリストから除外した。

ニホンカモシカが、今回の改訂のための調査期間中の2019年6月26日に、本県において確認された。確認場所は東かがわ市与田山であり、確認場所が含まれる本県と徳島県の県境に位置する讃岐山脈における本種の生息情報はこれまで報告されていない。四国における本種の主な生息地は剣山地を中心とした徳島県から高知県東部にかけてであるが、森林の遷移やニホンジカとの競合などから生息地域の変化が報告され、近年ではこれまで知られていた地域における情報が減少し、その周辺地域での生息情報が散見されるようになってきている(徳島県教育委員会・高知県教育委員会 2011)。さらに、県内絶滅と

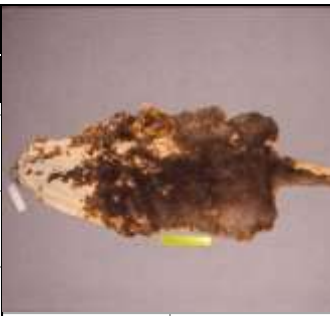
されていた愛媛県（愛媛県レッドデータブック改訂委員会編 2014）でも、2018年及び2020年に本種の発見情報が愛媛県自然保護課へ寄せられた（<https://www.pref.ehime.jp/h15800/choujyu/japaneseserow.html>）。四国地方のニホンカモシカは、『環境省レッドリスト2020』において絶滅のおそれのある地域個体群（LP）に指定されており、本県におけるニホンカモシカの生息状況は、今後注目すべきである。

特定外来生物による生態系等による被害の防止に係る法律（「特定外来生物法」2005年）により、特定外来生物に指定されているアライグマは、本県では広い範囲で生息が確認されている（金城・谷地森2007）。本種は1995年頃より県内で情報が得られ始めたが、現在では単独個体の確認だけではなく、親子と思われる成獣と幼獣の集団であったり、生後間もない幼獣が捕獲されたりしていることから、野外で繁殖し本県に定着してしまっている。本種は全国的に農作物への被害、捕食者として地域生態系への影響、及び人への健康への影響などが危惧されている。従って、今後本種の生息情報が得られた場合には、捕獲を中心とした対応をすることが地域生態系を維持するうえで重要である。

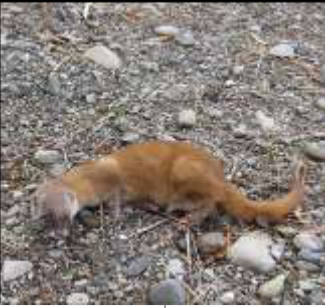
（谷地森秀二）

<b>アズマモグラ</b>		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
<i>mogera imaizumii</i> (モグラ科)		環境省カテゴリー	—	
選 定 理 由	⑤* 全国的な分布から見ると、主要個体群から隔離された遺存個体群である。香川県内でも分布が局限している。			
種 の 特 徴	モグラ属の中では最も小型種であるが、体サイズは変異に富む。上顎門歯の配列は浅いV字型を示す。香川県産では頭骨全長は35mm以下である。			
分 布	県内: 讃岐山脈、小豆島。 県外: 本州(中部以北)が中心で、部分的に遺存個体群が本州西部と四国にみられる。			被写体: 高松市 撮影者: 川口敏
県 内 で の 生 息 状 況	香川県内では2000年に東かがわ市引田、2004年に三豊市財田町、2012年に高松市塩江町で採集記録があるが、情報が少なく、県内での分布がまだ明らかになっていない。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、農地や河川、ため池の改修、土地造成などにより、生息環境が減少している。地形の改変は大型のコウベモグラの侵入を許し、本種の生息域を減少させる可能性がある。			
特 記 事 項	愛媛県(VU)、鳥取県・広島県(NT)、高知県・山口県(DD)などで絶滅危惧種に指定されている。			
文 献	1,2,4,7,8,15,17,22,23,24,29,35,39			執筆: 安藝真理

<b>テングコウモリ</b>		香川県カテゴリー	情報不足 (DD)	
<i>Murina hilgendorfi</i> (ヒナコウモリ科)		環境省カテゴリー	—	
選 定 理 由	⑤* 香川県における生息情報が極めて少ない			
種 の 特 徴	日本固有種。天狗の鼻のように、鼻孔が管状に突出した特徴的な顔をしている。日中の休息場は、洞窟や樹洞を利用する。森林に生息し、幅広い形の翼で林内を飛翔して昆虫類を捕食する。			
分 布	県内: 讃岐山脈および県中央の平野部。 県外: 北海道, 本州, 四国, 九州など。			被写体: まんのう町 撮影者: 谷地森秀二
県 内 で の 生 息 状 況	県中央部の溜池周辺の人工洞や隧道で冬期に休眠個体が確認されているほか、阿讃山脈の東部で秋期に飛翔個体が捕獲されている。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	日中の休息場である洞窟(人工洞含む)が埋められることによる休息場の消失および採餌環境である森林の消失が懸念される。			
特 記 事 項	大阪府・岡山県(CR+EN)、愛媛県・広島県(VU)、山口県・島根県(NT)、和歌山県(DD)、兵庫県(要調査)			
文 献	4,6,15,16,22,25,26,28,29,32,37,39			執筆: 谷地森秀二

<b>ニホンカワウソ</b>		香川県カテゴリー	絶滅 (EX)	
<i>Lutra nippon</i> (イタチ科)		環境省カテゴリー	絶滅 (EX)	
選 定 理 由	⑨* 過去50年来、確認されていない種。			
種 の 特 徴	近年の研究により、日本固有種と考えられている。河川の中下流域から沿岸部にかけて生息し、岩の上などの目立つ場所に糞やタール便と呼ばれる分泌物を残して存在を誇示する。			
分 布	現在も、愛媛県と高知県では本種と思われる動物の目撃情報があるが、その他の地域では生息情報は得られない。			被写体: さぬき市 撮影者: 金子之史
県 内 で の 生 息 状 況	文献および標本では第二次大戦前に小豆島福田村、小田村沖津で生息していた。香川県内では既に絶滅している。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河川・海辺の水辺環境の改変による生息環境の悪化および餌資源の減少。			
特 記 事 項	環境省は2012年に絶滅とした。Lutra属とみられる個体が、2017年2月に長崎県対馬において自動撮影装置によって撮影された。			
文 献	3, 4, 5,9,15,19,25,31,33,36,38			執筆: 谷地森秀二

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ニホンイタチ <i>Mustela itatsi</i> (イタチ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑧※ 香川県における近年の分布域が減少している。		 <p>被写体: 丸亀市 撮影者: 香川河川国道事務所</p>
種 の 特 徴	雄は雌よりも著しく大きい(性的二形)。類似種のシベリアイタチに比べ体サイズは小さく、尾率は本種で40%程度、シベリアイタチで50%以上とされるが2種で重複する場合がある。		
分 布	県内: 讃岐山脈とその丘陵部, および小豆島 県外: 本州, 九州, 四国, 屋久島, 種子島, 佐渡島, 奄岐島など		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈沿い, 半島・海岸の近くに分布し, ため池の近くや河川などで確認されている。小豆島にシベリアイタチが侵入しているという情報はない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	競争関係にあるシベリアイタチが分布域を拡大して本種の分布域を狭めているとされているが, 河川では同所的に確認されている場合もあり, 詳細は不明。		
特 記 事 項	大阪府・岡山県 (VU), 鳥取県・島根県・大分県 (NT) などで絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	12,13,14,26,27,28,30,32,35	執筆者: 福田 和恵	

※選 定 理 由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国権限, ④県固有種, ⑤県内権限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

◎ 哺乳類 ◎

文 献

- 1 阿部 永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦愷悟・米田政明. 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会.
- 2 阿部 永. 2001. モグラ類における遺存個体群とその維持機構. 哺乳類科学41:35-52.
- 3 安藤元一. 2008. ニホンカワウソ - 絶滅に学ぶ保全生物学 -. 東京大学出版会.
- 4 愛媛県レッドデータブック改訂委員会編. 2014. 愛媛県レッドデータブック 2014 RED DATE BOOK EHIME -愛媛県の絶滅の恐れのある野生生物-. 愛媛県県民環境部環境局自然保護課.
- 5 Endo H, Ye Xiaodi, Kogiku H 2000. Osteometrical study of the Japanese otter (*Lutra nippon*) from Ehime and Kochi prefectures. Memoirs of the National Science Museum 33:195-201.
- 6 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課編. 2017. 兵庫県版レッドデータブック2017 (哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類). (公財) ひょうご環境創造協会.
- 7 金子之史. 1984. 大滝山(徳島県)山頂でアズマモグラが採集される. 香川生物(12):37-39.
- 8 金子之史. 1994. 大滝山・竜王山・大川山の哺乳類. 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観(香川県) 6:1-6.
- 9 金子之史. 2003. 香川県志度町小田沖で捕獲(1944年)されたカワウソ毛皮標本. 香川生物 30:5-8.
- 10 金城芳典・谷地森秀二. 2007. 四国における外来種アライグマ*Procyon lotor*の現状. 四国自然史科学研究, (4):1-9.
- 11 川田伸一郎・岩佐真宏・福井 大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽 創・姉崎智子・横畑泰志. 2018. 世界哺乳類標準和名目録. 哺乳類科学 58(別冊):1-53.
- 12 川口 敏. 2000. 香川県東部における中型哺乳類5種の交通事故死の分布. 香川生物27:47-53.
- 13 川口 敏. 2006. 香川県産*Mustela*属2種の事故死体の同定と分布. 哺乳類科学46(1):35-39.
- 14 頃末敏秀. 1999. 香川県の小豆島で発見されたニホンイタチ. 香川生物26:27-30.
- 15 高知県レッドデータブック(動物編)改訂委員会編. 2018. 高知県レッドデータブック2018動物編. 高知県林業振興・環境部環境共生課.
- 16 コウモリの会編. 2011. コウモリ識別ハンドブック改訂版. 文一総合出版.
- 17 櫛橋秀晃. 1982. 小豆島におけるモグラ(*Mogera*)属2種の採集について. 香川生物 (10):43-51.
- 18 前田喜四雄. 2001. 日本コウモリ研究誌:翼手類の自然史. 東京大学出版会.
- 19 宮本春樹. 2015. ニホンカワウソの記録. 最後の生息地 四国西南より. 創風社出版.
- 20 森井隆三. 1985. 満濃池周辺の翼手類(哺乳綱). 国営讃岐丘陵公園動植物現況調査報告書. 39-46 pp.
- 21 森井隆三. 2005. コウモリとともに. 株式会社美巧社.
- 22 森井隆三. 1993. 奥山(香川県木田郡三木町)周辺の哺乳類. 香川県高等学校教育研究会理化生地部会誌 (29):53-56.
- 23 Motokawa M, Abe H 1996. On the specific names of the Japanese moles of the genus *Mogera* (Insectivore, Talpidae). Mammal Study 21: 115-123.
- 24 根津克浩. 1990. 小豆島におけるモグラ(*Mogera*) 2種の分布. 香川生物 (17):33-38.
- 25 Ohdachi S D, Ishibashi Y, Iwasa M A, Fukui D, Saitoh T (eds.) 2015. The Wild Mammals of Japan. Second Edition. Shoukadoh Book Sellers and the Mammal Society of Japan.
- 26 岡山県野生動物調査検討会編. 2020. 岡山県版レッドデータブック 2020 動物編. 岡山県.
- 27 大分県自然環境学術調査会編. 2012. レッドデータブックおおいた = Red data book : 大分県の絶滅のおそれのある野生生物. 大分県生活環境部生活環境企画課.
- 28 大阪生物多様性保全ネットワーク編. 2014. 大阪府レッドリスト2014. 大阪府環境農林水産部みどり・都市環境室みどり推進課.
- 29 レッドデータブックひろしま改訂検討委員会編. 2012. 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 : レッドデータブックひろしま2011. 広島県環境県民局自然環境課.
- 30 佐賀県環境生活局. 2004. 佐賀県レッドリストRed List2003. 佐賀県環境生活局.
- 31 佐々木 浩. 2016. 日本のカワウソはなぜ絶滅したのか. 人間文化研究所年報, 27:95-111.
- 32 島根県環境生活部自然環境課. 2014. 改訂しまねレッドデータブック2014動物編~島根県の絶滅のおそれのある野生動物~. 島根県環境生活部自然環境課.
- 33 Suzuki T, Yuasa H, Machida Y 1996. Phylogenetic position of the Japanese river otter *Lutra nippon* inferred from the nucleotide sequence of 224 bp of the mitochondrial cytochrome b gene. Zoological Science 13:621-626.
- 34 徳島県教育委員会・高知県教育委員会. 2011. 四国山地カモシカ特別調査報告書. 徳島県教育委員会・高知県教育委員会・特定非営利活動法人四国自然史科学研究センター.
- 35 鳥取県生物学会編. 2012. レッドデータブックとっとり改訂版-鳥取県の絶滅のおそれのある野生動物-. 鳥取県生活環境部公園自然課.
- 36 上田浩一・安田雅俊. 2016. 五島列島におけるカワウソの分布と絶滅. 哺乳類科学, 56(2):151-157.
- 37 和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室編. 2012. 保全上重要なわかやまの自然-和歌山県レッドデータブック- [2012年改訂版]. 和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室.
- 38 Waku D, Segawa T, Yonezawa T, Akiyoshi A, Ishige T, Ueda M, Ogawa H, Sasaki H, Ando M, Kohno N, Sasaki T 2016. Evaluating the Phylogenetic Status of the Extinct Japanese otter on the basis of mitochondrial genome analysis. PloS ONE 11(3):e0149341. doi:10.1371/journal.pone.0149341.
- 39 山口県環境生活部自然保護課編. 2019. レッドデータブックやまぐち 2019. 山口県環境生活部自然保護課.